ホエールウォッチングガイド（インタープリター）の養成

小笠原ホエールウォッチング協会　森　恭一

概要と実践の目的

クジラやイルカを観察するホエールウォッチングは、対象となる鯨類、広義の意味では野生動物や自然と親しむ手段のひとつであり、単なるリクリエーションとしてだけではなく、環境教育、自然保護教育の題材となる要素も持ち合わせている。また、ホエールウォッチングはツアー催行事業者のみならず、該当地域の宿泊・飲食・交通の利用やそれにともなう雇用の創出から、地域経済に与える影響も少なくなく、エコツーリズムの実践の場としても期待されている。

ホエールウォッチングは多くの場合、船に乗って洋上に出ることから、事業者の催行するツアーに参加することになる。各事業者は、船そのものや船上設備といったハード面と、操船方法やクジラやイルカの出現海域の情報収集と分析、そして船上での接客やガイドといったソフト面の両方を提供することになる。

本実践では、参加者と自然との橋渡しをするガイド（インタープリター）の役割をさらに充実させることが、ひいてはホエールウォッチングが単なる観光産業としてではなく、環境教育のひとつの手段になると考え、その基盤づくりを目指した。

これまでの取り組み

小笠原では1988年からホエールウォッチングがおこなわれており、観光客数の増加とそれに伴う経済効果から、当地の観光産業の一翼を担うまでに成長した（Mori and Yamada, 1996）。これまでもクジラやイルカに関係する普及活動は、事業者の催行するウォッチングツアーとは別に、ある意味でこれを補完する目的を持って陸上観察会や定期的なレクチャー、各種講演会といった形で開催されてきた。しかし、観光客と直に接する船上でのガイドの役割は、より重要であることから、その必要性と質の向上が課題となっていた。

実践内容

ツアー催行者とそのスタッフに対して、「ガイド養成講座」と称する公開講座を１～２ヶ月ごとに開催した。内容は、対象とする鯨類に関することにとどまらず、地域の自然や文化、関係法令、接客法、救急法、ガイドテクニックを網羅し、ガイドとしてウォッチング参加者と自然との橋渡しをするのに必要な知識や技術の習得と向上を目指した。１回の講座は原則として２部構成とし、それぞれ30分～１時間を１単位として、第１部を鯨類関係の話題、第２部をその他の話題とした。また、各内容のレジメを統一形式で作成し、受講者がファイリングしていくことで、簡単なハンドブックが出来上がるような試みもおこなった。

なお、内容が多岐に渡ることや、継続的な情報の提供、技術の向上の必要があることから、このガイド養成講座は今後も継続する予定である。

今後の課題

わが国でのホエールウォッチングは、ここ10年の間に急速に各地に広がり、動員人数や経済効果を見れば成長が著しい。しかし、教育的側面での取り組みは必ずしもその成長には追いついていない。世界的にみれば先進的な取り組みをしているところも多く、その教育的な価値についても評価され、その実践のための具体的な提案がされている（IFAW *et al.*, 1997）。本実践の試みも、試行錯誤でおこなっているところも多く、ガイドの育成方法、またその運営方法や資金、教材の確保など多くの課題を抱えているが、こうした普及活動の必要性は、今後さらに大きくなるであろう。

引用文献

IFAW, WWF and WDCS, 1997, Report of the International Workshop on the Educational Values of Whale Watching. Provincetown, Massachusetts, USA, 40pp.

Mori, K. and Yamada, T., 1996, Case Study of the Whale Watching in Ogasawara (Bonin) Islands. : P40-46, In : Encounters with Whales 1995

Proceedings. Colgan, K., Prasser, S. and Jeffery, A. (Eds.), Australian Nature Conservation Agency, 215pp.